

# 伝統的農法の復活を通した 自然共生型の島づくり —西表島と対馬からの事例報告

松村 正治(人間環境学科)

## はじめに

近年、国の内外を問わず、持続可能で自然共生型の地域社会を築こうとする試みが盛んであり、そのための手法として地域知・民俗知を積極的に生かそうとする動きが顕著になっている(野本, 1994)。この背景としては、まず社会開発の分野で、近代科学技術による地域性を無視した普遍的な手法に限界が見え始め、持続可能な開発のためにはローカルな知を役立てることが必要とされてきたことがある。また、環境保全の面でも、欧米の環境思想のように人間と自然を二項対立的に捉えるのではなく、人間-環境系というシステムとして把握する必要性が広く理解されてきたということもある。つまり、ローカルな自然を保全するためには、自然と人間とのかかわりを保障されるべきと考えられるようになり、風土に根ざし地域社会に埋め込まれた智慧や技術の総体に注目が高まっているのである。

本研究では、こうしたローカル・ナレッジ(Geerts, 1983=1991)の再評価という動きを踏まえながら、伝統的な農法を復活させることで地域の生態系を再生しようとしている西表島と対馬の事例を取り上げる。この2つの離島には、イリオモテヤマネコ (*Prionailurus bengalensis iriomotensis*) とツシマヤマネコ (*Prionailurus bengalensis euphilura*) がそれぞれ生息しているが、個体数はともに100頭程度と推定されており、絶滅が危惧されている。このような現状に対して、ヤマネコに象徴される豊かな生態系を取り戻したいと願い、人と自然の関係を修復しようとする動きが地域住民の中から生まれている。す

なわち、西表島では機械や農薬を極力使用しない稲作を、対馬では伝統的な<sup>こば</sup>木庭作(焼畑)を、それぞれ復活させている。本稿では、西表島と対馬の事例を比較分析する準備作業として、これら自然共生型の島づくりの現状を報告する。

## 1. 西表島からの報告

### 1) 島の暮らしを受け継ぐ試み

沖縄県八重山諸島に属する西表島は、原生林に広く覆われ、河川には国内最大のマングローブ林が繁茂し、イリオモテヤマネコに代表される固有の動植物も数多く生息・生育することで知られている。島の主要産業は農業と観光業であるが、近年は原生的な自然環境を観光資源としたエコツアーが盛んになっている。すでに西表島では、1994年に島民と研究者の協力によってエコツーリズムのガイドブック<sup>1</sup>を発行し、1996年には日本で初めてエコツーリズムを推進する組織（西表島エコツーリズム協会）も発足している。こうしたことから、西表島は日本のエコツーリズムの先進地と言われている（海津・真板, 2001）。

一方で、西表島の実態を批判的に見る向きもある。たとえば、奥田夏樹はガイド付き自然体験ツアー（西表島では「エコツアー」という商品になっている）のブームが、観光産業による自然利用の大衆化を招来し、自然破壊の要因になっていると批判する（奥田, 2007）。また、「エコツーリズム」とは名ばかりで、地域の自然や文化を大事にしない自分勝手な「エゴツーリズム」であるように報じられたこともある<sup>2</sup>。さらに、西表島ではエコツーリズムが主として島外出身者によって担われており、島出身者の関与が少ないために、地域社会への影響という点で不公平感を拡げる可能性も指摘されている（松村, 2004）。

しかし、西表島エコツーリズム協会（以下、協会）は、批判されている現状を改善するために積極的かつ直接的な対策を講じているようには見えない。それは、批判を軽く受け流しているからではない。そうではなくて、協会がエコツーリズムを根源的な水準で捉えているからであり、観光の実態は表層的な現れに過ぎないとみなしているからである。

西表島のエコツーリズムが先進的と言われる理由として、その理念を外部から導入したのではなく、いわば自前で作り上げたという内発性や独自性を挙げることができる。すでに1970年代から、パイナップルやサトウキビ栽培などの基幹産業が衰退する中で、これに代わる産業の必要性を感じた農家が島の資源を生かした観光のあり方を模索し始めていた。たとえば、石垣金星さんが代表を務める「西表をほりおこす会」は1975年から地道な島おこし活動を続けていた。そうした自主的な動きの中から、島人たちはエコツーリズムという言葉に出会い、そこに込められている理念が自分たちの活動の目標と重なっていることを発見したのである。

このような経緯を踏まえて、協会が今日取り組んでいるエコツーリズムの普及とは、単に商品としての「エコツアー」を広めることではなく、現在の問題を対症的に正すことでもない。協会は「自然と共生する文化、つまり西表の暮らしそのものが魅力的」であり、島の暮らしそのものが地域の自然や文化を生かすというエコツーリズムの理念を体現していると考えている。だから、その暮らし方を見つめ直すことに活動の力点が置かれているのである。また、しばしばエコツーリズムの目的の1つとして旅行者に対する環境教育が挙げられるが、それよりも協会が重視しているのは島の住民に対する環境教育である。この背景には、「西表の自然や文化を守る義務があるのは島に住む人間」であり、「外部に頼るのは最後。観光客が引き継ぐ必要はない。観光客には、その人たちが住むところで繋げて考えて欲しい」というスタンスがある<sup>3</sup>。そして、島民の意識の中に地域の自然や文化を大切にするという理念が埋め込まれていれば、現れとしてのエコツアーの問題は自ずと解消できると考えられている。

こうした思想を携えた協会が、現在、熱心に取り組んでいる活動は伝統的な稲作である。「西表の場合、稲作文化が分からないと島の暮らしを本当には理解できない」という考えから、2006年に「田ちくり講座」と題して米づくりを始めたのである。米の生産が主たる目的ではないので水田面積は1反にも満たないが、祖内地区に田んぼを構え、島出身者に指導を受けながら無農薬で化学肥料を使わない伝統的な稲作を実践している。

協会で働く事務局スタッフ3人はナイチャー（「内地」の人）である。そう

した島外からの移住者からすると、島の暮らしを「本当に」理解するためには、島人と自然とのかかわりの深層レベルにまで達する必要があると実感しているのだろう。その水準とは、日常的にはあまり目立たないが、非日常的な祭事のときに顕現するような精神性を帯びたものである。祖内や干立といった古い集落で行われる祭事は稲作に関わるものが多いが、その一つひとつの行為の意味を理解するためには、実際に米をつくるという作業から体感する必要性があったものと思われる。

この伝統的な稲作と同様に、島の暮らしを理解しようと始められたのが手業講習会である。これは、島人たちが身の回りの素材を使って生活用具を作ってきたこと、そのプロセスを材料となる植物の採集から学ぶものである。具体的には、アダン葉ぞうり、ピーデ(コシダ)籠、アンツク(アダンの根で編んだ籠)、正月飾り講座、凧などを作る講座を開いてきた。ここで注目すべきは、協会が受け継ごうとしていることは民具づくりの技術だけではないことである。生活用具は、島の風土に合わせて先人たちが長い年月をかけて完成させた知恵の結晶である。協会はこのように民具を島の文化として捉え、島の暮らしの一部として継承しようとしている。つまり、協会は島の暮らしを自然と共生する文化の総体として認識し、これを受け継ぐことを活動の中心に据えているのである。

協会のスタンスが明瞭に現れるのは、旅行者を対象に比較的簡単な島の手業を教えるときである。西表島では、マーニ(コミノクロツグ)を用いて比較的簡単な民具を作ることが多いので、旅行者を対象とした場合でもマーニ細工を教えるのがよいだろうと普通は考える。しかし、協会が旅行者に教えるのはマーニではなく稲藁を使った民具である。西表島ではマーニが身近な植物であるけれども、多くの旅行者の居住地には生えていない。だから、かりにマーニ細工の作り方を旅行者に教えても、観光地における一過性の体験として終わってしまいがちなのである。その点を考慮して、西表島でも旅行者の居住地でも入手しやすい稲藁を材料として選んでいる。藁細工の作り方を学べば、旅行者の住む地域でも同様の民具が伝承されているはずなので、それぞれの足もとにある生活用具に目を向けることも可能である。協会が期待しているのは、西表島における一時の体験をきっかけとして各自の生

活を見つめ直すことなのである。

## 2) 島の生活を見つめ直す試み

協会が稲作に着手した理由は、島の暮らしを丸ごと理解するためだけではない。西表島でも耕作放棄地の増加が問題となっており、こうした現代的な地域社会の問題に取り組むという側面もある。つまり、島で現実に生じている自然や文化の問題に対して、協会としての立場を示しながら、島民にも意識の向上を促そうとしているのである。こうした協会の活動方針がよく現れている事業として、ビーチクリーンアップを挙げることができる。毎月、西表島の海岸に漂着するごみを、場所を決めて拾うのである。海岸法には、海岸のごみを誰が処理すべきなのか書かれていないため、漂着ごみを拾っても処理費は自己負担となるのが現状である。そこで協会では、ごみを大量に拾うことを目的とはせず、ごみがどこから流れてきたのか、どのようなごみが多いのかなどを調査・分析することに力を入れている。つまり、ごみを収集して問題を表面的に解決することよりも、ごみ問題の原因を探ることを通して、島民がごみについて意識化することを目指している。

こうした視点から実施されている事業として、ほかに無添加石けんの普及がある。島には下水処理施設が整備されていないので、多くの生活排水がそのまま海へと流れ込んでしまう。そこで、一般に使用されている合成洗剤ではなく、自然に分解される無添加石けんの使用を勧めて、日常生活における環境への配慮を促している。

以上のように協会の活動方針は一貫している。稲作や手業などを体験的に学ぼう島民に呼びかけながら、島の伝統的な暮らしを受け継ぐ。そして、そこに含まれる自然と共生する文化を対自化して、これからの持続可能なライフスタイルを模索するときの参考にしようとしているのだ。

こうした実践の必要性は、シマンチュー(島人)よりもナイチャーの方が感じ取りやすい。そのことは「地元／よそ者」論などが指摘しているとおりである(鬼頭, 1998)。実際、協会の事務局職員3名はいずれもナイチャーである。そしてまた、「田ちくり講座」や手業講習会に参加する人たちも、多くはナイチャーであるという。協会が継承しようとしている島の暮らしは、島外

に生まれ移住してきた人たちによって担われていくのかもしれない。島の文化は島人によって継承されるべきだと考えるならば、この事態は由々しきことであろう。しかし、西表島の歴史をひもとけば、戦前の炭鉱労働者、戦後の移民開拓、今日の移住ブームなど、島の社会は移住者を受け入れながら形成されてきたとも言える。したがって、シマンチューだけではなくナイチャーも含めた島民が、それぞれの役割を果たしていくことこそ、西表島のエコツーリズムをすすめる上で重要と思われる。

### 3) ヤマネコと共生する環境再生の構想

西表島には廃村になった集落がいくつかあり、島の南西部に位置する網取、<sup>かのかわ</sup>崎山、鹿川がよく知られている。しかし、島の北西部に位置し浦内川沿いにあった稲葉集落について書かれた文献は少ない。

浦内川で観光業を営む平良彰健さんは稲葉集落の出身であり、少年時代に豊かな暮らしが息づいていたことを記憶している。それにもかかわらず、稲葉について記録されたものが少ないことから、自分が経営する飲食店に名前を残そうと考えて「キッチンイナバ」とした。以下は、平良さんへの聞き取り調査の結果をまとめたものである<sup>4</sup>。

戦中の稲葉には旧日本軍の製材所があり、周囲の森林から多くの木材が伐り出されていた。従業員を中心とした集落が形成されていたが、1944年9月、鉄砲水のために集落は流出してしまい、一時は誰も住む人がいなくなった。しかし、集落跡では浦内川沿いに水田を開けることから、祖内や住吉などから通耕する人びとが現れ、次第に居所を移す人が集まって15戸程度の集落が形成された。当時の稲葉の人びとは、稲作を主たる生業として、農閑期には林業に携わって生計を立てた。換金性の高い米や木材などを生産していたので、稲葉の生活水準はほかの集落よりも高かったという。

平良さんが稲葉に住んでいたのは小中学生の頃である。稲葉から祖内まで片道約6kmの道のりを通学した。幹線道路が整備されていくと、道路交通の不便な稲葉を出て行く家族が増えていった。平良家は最後まで稲葉に残っていたが、ついに中学3年生のとき(1969年)、稲葉を出て浦内へと引越した。それ以来、今日まで稲葉に住む人はいない。豊かな実りをもたらし



た水田の記憶が忘れられないようにと、「キッチンイナバ」のカウンターには当時のモノクロ写真が飾られている。このことから、平良さんの稲葉に対する思い入れの強さがうかがわれるが、稲葉の水田を写真の中でよみがえらせるだけではなく、できれば当時の環境を実際に復元したいと願っている。そして、この夢はイリオモテヤマネコと共生するために必要なことであると考えられている。

復帰前までは、浦内川、仲良川、ヒナイ川など、河川の周辺には水田が広がっており、島西部の集落から舟を使って通行する姿がよく見られた。しかし、現在は豊原と白浜を結ぶ幹線道路沿いに水田が集中している。このため、イリオモテヤマネコは水田に棲む生物を求めて道路に出てきて交通事故に遭うのだらうと、平良さんは推測している。そして、昔のように河川沿いに水田を形成し、そこに豊かな採餌環境を整えて道路に出さないようにする対策が有効だと考えられている。希少な野生動物が絶滅に危機に瀕している状況を、餌不足に原因があると認識し、改善策として伝統的な農業を復元しようとする考え方は、次に報告する対馬の事例と似通っている。

## 2. 対馬からの報告

### 1) ヤマネコの採餌環境の整備

長崎県の対馬は日本海の西に位置し、韓国釜山からは50km足らずの距離にある。この対馬に生息するツシマヤマネコはイリオモテヤマネコに劣らず絶滅の危機が切迫している。ともに生息数は80～100頭程度と推計されており、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(通称「種の保全法」)の国内希少野生動植物種に指定され、保護増殖事業の対象となっている。また、環境省が1998年に見直したレッドリストでは、イリオモテヤマネコが絶滅危惧IB類(EN)とされたのに対し、ツシマヤマネコは絶滅危惧IA類(CR)として掲げられ、より危機的状況が高いと判断された<sup>5)</sup>(2007年の見直しによりイリオモテヤマネコも絶滅危惧IA類(CR)となった<sup>6)</sup>)。

こうした状況に対して環境省は1997年に対馬野生生物保護センターを設置し、主としてツシマヤマネコの生態や現状についての普及啓発や、調査研究、保護増殖などを実施している。しかし、環境省の取り組みが始まる前か

ら、すでに対馬では地域住民が主体となって「ツシマヤマネコを守る会」(以下、守る会)を発足し、保護活動を展開していた(山村, 1996)。

守る会は1993年に地元の山村辰美さんを中心にして設立された。ツシマヤマネコもイリオモテヤマネコと同様に、交通事故で死亡する例が少なくないが、この原因として考えられているのが餌不足である。このため、守る会の活動はツシマヤマネコを対象とした給餌・調査が中心となっている。

守る会の考え方は次のとおりである<sup>7</sup>。対馬は面積の9割近くを山林が占めるので、かつて島人は木庭作(焼畑)をおこなって、麦類、サツマイモ、ソバなどを自給用に栽培していた(月川, 1988)。このため、ヤマネコの餌となる小動物が山林部にも多く生息していたと考えられる。しかし、高度成長期を迎えて食糧難が解消されると、木庭作は放棄されるようになった。また、拡大造林政策によりドングリのなる広葉樹林が人工林へと置き換わり、道路建設などの公共工事により島の開発が進むにつれて、ツシマヤマネコにとっては生育環境、特に採餌環境が大きく改変されたものと考えられる。このように生息数減少の主たる要因が餌不足にあると推理して、年間を通じて数か所で鶏ガラを与える給餌活動をおこなっている。

いわば、この給餌が緊急対策として実施されているのに対して、より抜本的な対策として採餌環境を改善しようとする試みもある。2003年から上<sup>かみ</sup>県町仁田地区の耕作放棄地7反を借りて始めた「動物たちの園」作りがそれである。耕作されていなかった農地を開墾して、ダイズやソバを育てている。ヤマネコの餌となるネズミ類などを増やすことが目的なので、ダイズやソバが実を付けても収穫せずにそのままにしている。

これと同じ発想でヤマネコの餌を増やそうとする試みは、環境省対馬野生生物保護センターも実施していた。2001～2003年度の3年間、ヤマネコの餌を増やすために木庭作を復活させるモデル事業を上県町中山地区などでおこなった。このときは、山間部の荒地や休耕地を無料で借り受け、下草を焼き払わないものの開墾し、地元の農家などの協力で麦類やサツマイモなどを育てた。

こうした動きのほかに注目すべき事例として、「舟志の森」<sup>8</sup>にふれておく必要がある。舟志の森とは、住友大阪セメント株式会社が上県町舟志地区



に所有する面積16haの森林で、セメントの副原料となる粘土を採掘するために1989年に取得したところである。その後、セメント需要の減少やリサイクルの拡大により開発が凍結され、森林の適正な管理はおこなわれていなかった。

一方、この舟志の森に着目し、ツシマヤマネコをはじめとする野生生物のための森林管理ができないかと発案したのは「ツシマヤマネコ応援団」(以下、応援団)である。応援団は、対馬野生生物保護センターの活動を支援するボランティア団体として2003年に発足した。2004年からは、ヤマネコが多数生息していた頃のような豊かな森を再生させようと「とらやまの森再生プロジェクト」に着手した。この活動は、対馬の人工林が伐期を迎えたものの再造林される見通しが立っていなかったため、伐採跡地が放置されることを心配して広葉樹の苗を育て始めたところから始まった。しかし、人工林の長伐期化のために、伐採跡地に植樹するために育てた苗木が行き場を失ってしまい、植えるのに適当な場所が必要となっていた。そこで応援団は、地元の上対馬町舟志地区を通して、遊休地となっていた舟志の森を「ツシマヤマネコ保護のモデル林としたい」と住友大阪セメントへ提案した。2007年に創業100周年を迎えた住友大阪セメントは、CSR(企業の社会的責任)として適当な事業を検討していたところだったので、この提案を受け入れて協力することにした。このモデル林事業は、5年間をかけて伐採・間伐・植林をおこない、その効果を確認していくもので、住友大阪セメントは舟志の森を無償提供し、森林管理に掛かる費用も出資している。

2007年2月16日、住友大阪セメント、ツシマヤマネコ応援団、上対馬町舟志地区、対馬市の4者による「舟志の森づくり推進委員会」の発足式が開催され、「舟志の森づくり協定」を締結した<sup>9</sup>。3月25日には、この推進委員会が主催となって植樹祭が開かれ、ツシマヤマネコ応援団によって育てられた対馬産の広葉樹が人工林の皆伐跡地に植えられた。また、植樹地にソバを播けば、ヤマネコの餌となる鳥類やネズミ類が増えるとともに、雑草も抑制できるという舟志地区の提案を受け、8月24日にはソバの播種をおこなった。このように、企業の社会貢献活動と連携することで、これまで紹介した木庭作復活の事例よりも枠組みの大きな環境再生プロジェクトが始まったところである。

## 2) 草原景観の再生を目指した野焼きの復活

このように対馬では、ツシマヤマネコが減少している原因を餌不足にあると考え、採餌環境を改善する必要性から伝統的な木庭作を復活させようとする動きが広がっている。これは、ツシマヤマネコという種を絶滅から防ぐためだけではなく、ヤマネコの生息に表象される人と自然との豊かなかかわりを取り戻そうとしているように見える。この願いがきわめてよく現れた形として、千俵<sup>せんびょう</sup>蒔山<sup>まきやま</sup>草原再生プロジェクトがある。

2008年3月9日、対馬の最北端、上県町佐護に位置する千俵蒔山で、地域住民による野焼きがおこなわれた。これは、麓に位置する佐護地区の住民が、かつての千俵蒔山の草原景観を再生させたい、次世代に継承していきたいという思いから40年ぶりにおこなわれたものであった。野焼きは佐護区長を本部長にして、警察署、消防署、地元消防団など、総勢83人のスタッフが、点火員、消火隊、見張り役に別れておこなわれた。午前8時、消防サイレンを合図に点火し、約1時間半で1.8haの枯れ草を焼き尽くした。

かつての千俵蒔山は草原に広く覆われ、その美しさから一帯は壱岐対馬国定公園に指定されている。牛馬の飼料の採草地として利用されていたため、毎年、野焼きがおこなわれて草原が維持されていた。しかし、1960年頃から農業の機械化や離農が進み、1968年を最後に野焼きは途絶えていた。その結果、急速に森林化が進み、1974年に105.9haあった草原が今では山頂部に7.4haを残すのみとなり、約93%の草原が消失してしまった<sup>10</sup>。

この現況に心を痛めていた地域住民は多かった。千俵蒔山は付近の小学生が遠足で必ず登る山だったので、いつかまた昔のような草原を復活させたいと考えている人たちはいた。その願いが具体化に向けて40年ぶりに千俵蒔山で野焼きを復活させようとプロジェクトが始動したのは2007年3月だった。きっかけは、よそ者としての環境省の働きかけだった。対馬野生生物保護センター(以下、センター)が、2004年から島内で集落座談会を重ねながら、ツシマヤマネコの保護と地域の活性化を両立していく方向性を探っていた。佐護地区はヤマネコが多く生息するところであり、ここでモデル事業を実施できたらとも目論んでいた。そこで、佐護地区で集落座談会を開いてみると、千俵蒔山を誇らしく思い、かつての景観をよく記憶に留めている人たちがい

た。センターの職員は、郷土資料から昔の千俵蒔山の写真を収集し、それを地域住民に見せながら記憶を拾っていった。そうした作業を重ねるうちに、座談会を開いて地域の資源を再認識するだけではなく、何かできることから実行しようという機運が高まり、千俵蒔山草原再生プロジェクトが始まった。

このプロジェクトでは、地元の住民が「以前のような、のどかな美しい草原を取り戻したい」と草原景観の再生を重視しているのに対して、センターでは「野焼きは、豊かな草原を維持する上で意義がある。草原が復活すれば、様々な生き物も住み着き、ツシマヤマネコの保護増殖につながるのではないかと、ヤマネコの採餌環境の改善を目指している<sup>1)</sup>。それぞれの目標には微妙な相違があるものの、野焼きによる草原再生が必要であるという認識では一致しており、協働のあり方を考える上で示唆に富む事例と言えるだろう。

### 3. 今後の分析のために—4つの分析視角

これまで西表島と対馬における伝統的農法の復活事例を見てきたが、ここで本稿を締めるにあたり、今後の分析の際に有効となりそうな視角を整理しておく。2島の事例を比較分析する作業は今後の課題としたい。

#### (1) 伝統の意味

伝統的農法について分析を試みるとき、それぞれの社会における伝統の意味を吟味する必要があるだろう。「伝統的」であるとは、過去の農法の中から現在の社会が選択し、肯定的にせよ否定的にせよ現代的な意味を与えているものである(おそらく、ここで重要となるキーワードは、地域のアイデンティティや誇りだと思われる)。そうした社会構成的な「伝統的農法」が、歴史学的な検証を受けたときに、どのように評価されるのかを踏まえておくべきである。もちろん、「創られた伝統」の善し悪しを判断するためではなく、地域社会が伝統を創造していく論理を明らかにすることは必要であろう。

#### (2) 生業の変遷あるいは環境史

地域社会に伝わる農法を取り扱うのであれば、生業の変遷について知って

おくことは必須である。生業を調べると、その地域の地理的な環境特性や、市場や国家といった外部要因との関係も見えてくるはずである。そして、近代化以降の産業構造の変化が、人びとの生活環境をどのように変えたのか、どの時点が地域社会にとって決定的に重要な転換点であったのかを明らかにする必要がある。なお、生業の変遷といっても、ここでは人びとと空間的な環境の関わりの変化に注目するので、広く環境史という視点から捉えることもできるだろう。

### **(3) 動植物の民俗**

西表島や対馬では、ヤマネコに代表される希少野生生物の保護を前提にして島の活性化を考えなければならない。しかし、これが地域社会において、どれほど自明な前提条件であるのかは吟味しておく必要がある。今日では、絶滅危惧動物を守ることが当然のように思えるが、そうした動物愛護観や環境意識が形成されるまでは、食用とされることもあったに違いない。人びとの意識の変化を経験的に明証することは困難ではあるが、希少野生生物を含めた動植物の民俗を手がかりに、地域社会の動物観や生物観へと迫る方法が有効だろう。

### **(4) 人の移動**

環境社会学の「地元／よそ者」論では、よそ者の働きが重要であると指摘されてきたし、実際に西表島や対馬の各事例でも、よそ者がしばしばキーパーソンとなっている。しかし、「地元／よそ者」という概念は理想的には明瞭だが、事象を経験的に明らかにしようとする、「地元的なよそ者」「よそ者的な地元」なども必要になってくる。そこで、静的な「地元／よそ者」に変わって、人の移動という動的な変数を用いて実証的な研究を進めるべきと思われる。

## 注

- 1 西表島エコツーリズム協会（1994年）『ヤマナ・カーラ・スナ・ピトゥ 西表島エコツーリズム・ガイドブック』。
- 2 雑誌『ソトコト』（2001年6月号）木楽舎。
- 3 2005年9月7日、西表島エコツーリズム協会事務局長の井谷玄さんの言葉。
- 4 2006年2月27日に聞き取り調査をおこなった。
- 5 1998年6月2日、環境省報道発表資料「哺乳類及び鳥類のレッドリストの見直しについて」。
- 6 2007年8月3日、環境省報道発表資料「哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物I及び植物IIのレッドリストの見直しについて」。
- 7 2007年8月24日に聞き取り調査をおこなった。
- 8 「とらやま」とは対馬の人びとによるツシマヤマネコの呼び方で、虎毛の山猫という意味である。
- 9 『対馬新聞』2007年2月23日1面。
- 10 『対馬新聞』2008年3月21日4面。
- 11 『朝日新聞』2008年3月10日朝刊30面（長崎）。

## 文献

- Geertz, Clifford (1983=1991) Local knowledge: further essays in interpretive anthropology: Basic Books. (=梶原景昭・小泉潤二・山下晋司・山下淑美訳『ローカル・ノレッジ—解釈人類学論集』岩波書店.)
- 海津ゆりえ・真板昭夫（2001）「西表島におけるエコツーリズムの発展過程の史的考察」石森秀三・真板昭夫編『エコツーリズムの総合的研究』国立民族学博物館：211-239.
- 鬼頭秀一（1998）「環境運動／環境理念研究における『よそ者』論の射程—諫早湾と奄美大島の『自然の権利』訴訟の事例を中心に」『環境社会学研究』4: 44-59.
- 松村正治（2004）「開発と環境のジレンマ—八重山諸島の最適ツーリズム戦略」松井健編『島の生活世界と開発3 沖縄列島—シマの自然と伝統のゆくえ』東大出版会：71-100.
- 野本寛一（1994）『共生のフォークロア』青土社.

奥田夏樹 (2007)「日本におけるエコツーリズムの現状と問題点—西表島における  
フィールド調査から」『地域研究』(沖縄大学地域研究所) 3: 83-116.  
月川雅夫(1988)『対馬の四季—離島の風土と暮らし』農山漁村文化協会.  
山村辰美(1996)『動物百科 ツシマヤマネコの百科』データハウス.

This paper reports how the local people are enriching their environment to co-exist harmoniously with nature in the two remote inlands, Iriomote Island and Tsushima. They are inheriting traditional wet-rice cultivation in Iriomote Island and reviving slash-and-burn farming in Tsushima in order to increase the amount of food resources the endangered wild cats eat. For further comparative analysis, we need discussion through the following perspectives: meaning of tradition, subsistence change or environmental history, folklore of plants and animals, movement of people.